



09.22 アンナ・ポリトコフスカヤ追悼集会

ロシアの闇とチェチェンの平和を考える

日時: 2007 年 9 月 22 日(土) 13:30~16:30

場所: 文京区民センター 2A 会議室

共催: チェチェン連絡会議 市民平和基金 チェチェンニュース編集室
ハッサン・バイエフを呼ぶ会 社団法人アムネスティ・インターナショナル日本 日本ビジュアル・ジャーナリスト協会

後援: DAYS JAPAN

昨年の 10 月 7 日、チェチェン戦争を追っていたジャーナリストのアンナ・ポリトコフスカヤさんが、モスクワの自宅アパートで暗殺されました。彼女は 1999 年以来、毎月のようにチェチェンに通い、軍事侵攻で虐げられた人々についての地道な報道を重ねており、プーチン政権を厳しく批判していました。ポリトコフスカヤさんの死後、日本では新たに著書『ロシアン・ダイアリー 暗殺された女性記者の取材手帳』(NHK 出版)が刊行されるなど、皮肉にも暗殺によって、ロシア・チェチェン問題への関心が高まっています。

また、暗殺事件の直後の 11 月には、イギリスに亡命してプーチン政権を批判していた元連邦保安局 (FSB) 職員、A. リトビネンコ氏も暗殺されています。プーチン政権によると見られる、反対派に対する暴力は、見過ごすことはできません。平和・人権の運動や、ジャーナリズムの場でチェチェンに関わってきた私たちは、彼女の貴重な仕事を忘れず、あらためて暗殺への抗議の意を表するとともに、現在の状況を理解するための集会を開催します。

集会では、長年チェチェンを現地取材し、ポリトコフスカヤさんにも取材している林克明さんや、最近アムネスティ・インターナショナルが発行した人権報告書の解説など、アクションの呼びかけなど、有識者の報告を伺います。会場では、日本語に翻訳されているポリトコフスカヤさんの全著作と、9 月に刊行される林克明さんの最新刊、『プーチン政権の闇-チェチェン戦争・独裁・要人暗殺』(高文研)を販売いたします。また、遺族にあてたお見舞金を受け付けます。

●タイムスケジュール

13:30 開会あいさつ

13:35 映像 (NHK-BS「誰がアンナを狙ったのか-ロシア報道記者暗殺の真相-」)

14:35 林克明 (ノンフィクションライター) 「プーチン政権の闇を語る」

15:05 川上園子 (アムネスティ・インターナショナル) 「チェチェンにおける強制失踪と正義の実現」

15:25 休憩

15:35 岡田一男 (映像作家)
「ポリトコフスカヤの思い出」

16:05 質疑応答

●チェチェン連絡会議について

チェチェン連絡会議は、チェチェン戦争の平和的解決のために活動している NGO と個人が集まり、この問題への関心を日本の社会で喚起するために結成されました。戦争を少しでも早く終わらせるために、日本の国内でロシア軍の侵攻に反対する声を高め、各国の支援組織との連携を深め、国際世論としてのチェチェン戦争反対、ロシア軍の撤退を強く要求していきたいと考えています。ぜひ皆様のご協力と、参加をお願いします。

連絡先: 146-0082 東京都大田区池上 6-30-17

TEL&FAX: 050-3329-3951

Mail: clc@chechennews.org Web: <http://chechennews.org/>

郵便振替口座: 00180-6-261048 加入者名: チェチェン連絡会議

●アンナ・ポリトコフスカヤ追悼

石川逸子

アンナ あなたによってチェチェンを
チェチェンの惨を知った
潰されてしまった グローズヌイの町 コムソモーリ
スコエ村を
鳥もさえぎらない ドゥバ・ユルトの村を
ロシア連邦軍の懲罰作戦の餌食になった マフケティ
村
明け方にふいに連行され 穴牢に放りこまれて十二日
引き出されるや体に電流を通された ロジータのこ
とを
白い雪のなか 銃殺され焼かれた ツォツァン・ユル
トの若者を
裂かれた枕 小麦袋 持ち去られたジャガイモ 赤ん
坊の服 絨毯
墓地から盗まれた 遺体用の担架 スコップ
糞便で汚された 神聖なモスクのことを

アンナ あなたのペンは書いた
子どもたちがただ 家にいられるために
大金をさしださねばならなかった親たちのことを
長身ただただで逮捕され
行方しらずになったゴイティ村の若者イムランのこ
とを
家族から金だけせびり取って 行方不明者を探しもせ
ず
モスクワに帰っていってしまう将校たち
軍内部の強盗行為によって殺された 十九歳の兵士ダ
ニーラのことも

アンナ あなたはまた 称えた
設備すべてを壊されたなかで
なお 全力を尽くしている チェチェンの医師たち
廃墟に住んで 詩をかきつづける脊椎障害の女詩人
空爆に放置された老人ホームの老人たち八十九人をす
くいだした
マゴメド・ヤンジーエフ大佐の勇気 出世などつゆ望
まぬ精神を

アンナ あなたは探り そして臆することなく書いた
チェチェンのはてしない惨劇
惨劇をほしがっているものたちの欲望を
モスクワの雪のなか「冷血の時代」のなかで

Дорогая Анна! От вас я узнала о Чечне, трагедии Чечни
О разгромленном городе Грозном, раздавленном селе
Комсомольске,.

О селе Дубаюрт, где птицы перестали петь,

О деревне Махкетин, ставшей жертвой зачистки,
проведенной федеральными войсками,

О Розите, которую на рассвете ни с того, ни с сего
схватили и после 12 дневного заключения в зиндане,
подвергнули пытке электрическим током,

О цоцан-юртовском парне, прожженном на белом снегу
после расстрела,

О распоротой подушке, об увезенной картошке, об
одежде младенца, о содранном ковре,

Об украденной с кладбища лопате и носилках,

Об обгаженной святой мечети

Дорогая Анна! Ваше перо написало о родителях,
которые были вынуждены отдавать большие деньги
ради того, чтобы их детей не забрали,

О парне из села Гойты, арестованном только из-за того,
что он большого роста, и пропавшем без вести,

Об офицерах, которые получив деньги от
родственников пропавших без вести а не стали даже
искать их и уехали домой в Москву,

Об девятнадцатилетнем солдате Даниле, погибшем из-
за зверского обращения внутри армии.

Дорогая Анна! Вы восславляли чеченских врачей,
которые изо всех сил борются за жизнь людей в
разгромленных больницах.

Позтессу, пораженную позвоночным полиомиелитом,
которая живет в руинах и продолжает писать стихи,

Мужество и бескорыстие полковника Магомеда

Яндиева, который спас 89 стариков из брошенного под
бомбами дома престарелых.

Дорогая Анна! Вы расследовали и не боясь описала
Бесконечную трагедию Чечни,

Жадность тех, кто жаждет трагедии,

「私たちは二〇〇三年を生き抜けるのだろうか？」
と問うたアンナはもういない
いくども殺されかかり 不死鳥のようによみがえった
あなたは
二〇〇六年十月七日、
自宅アパートのエレベーター内で 撃たれ 命絶たれた

武器一つもっていないたった一人の女性が
権力の皮をかぶった強盗たちはそんなにも怖かったのか
たった一本のペンをそんなにも怖れたのか

アンナ あなたの死は告げる
あなたの著書が真実であり 核心にせまっていたことを
アンナ あなたの死は告げる
ペンの強さを ペンの力を

アンナ・ポリトコフスカヤ
あなたの限らない勇氣
歴史の闇のなかに消されていってしまうものたちへの
あなたの深い愛に
小さな島の片隅から哀悼の花束をささげます

～ アンナ・ポリトコフスカヤ著・三浦みどり訳『チェ
チェンやめられない戦争』（NHK出版）参照～

С нами уже нет той Анны, которая в снежной Москве в период холодной крови спросила « Сможем ли мы выжить и в 2003 году?»

Вы, которую не раз «хоронили» каждый раз возвращались к нам подобно фениксу, 7 октября 2006 года были убиты выстрелом в лифте своего дома

Для бандитов, прикрывающихся шкурой властей,
Неужели так страшна была обезоруженная женщина?
Неужели так они боялись ее пера?

Дорогая Анна! Ваша смерть – свидетельство того, что ваша книга правдоподобна, и о сути дела.

Дорогая Анна! Ваша смерть – свидетельство силы и мощи пера.

Дорогая Анна Политковская!

За ваше бесконечное мужество, и бесконечную любовь к тем, кого хотят вытеснить во тьму истории,

Я посвящаю Вам букет глубокой скорби из далекого уголка маленького островка.

Посвящается Анне Политковской.

Японская поэтесса Ицуко Исикава

●集会アピール『アンナ・ポリトコフスカヤさん暗殺1周年を迎えて』

2007年9月22日 於 文京区民センター

約1年前となる2006年10月7日、モスクワにおいて、ノーバヤ・ガゼータ紙のジャーナリスト、アンナ・ポリトコフスカヤさんが何者かによって銃撃され、生涯を閉じました。私たちは、ここに心から哀悼の意を表したいと思います。

私たちは、彼女の48年間という短い生涯で残された最後の仕事、すなわち、現代ロシアの暗部と、チェチェン戦争の泥沼を克明に報道する記者として、彼女を知りました。いま、日本では著書が次々に刊行され、多くの人が、彼女の貴重な仕事に気づき始めています。

ロシアのプーチン政権は、現在もチェチェンでの残酷な戦争と占領を続けており、人権侵害を組織的行なうラムザン・カディロフ傀儡政権を支持しています。

これによって、この12年間で20万人にも及ぶチェチェンの民間人が死亡し、多くの人々が難民としてロシア国外に逃れて、なすすべもなく避難の生活を続けています。

また、プーチン政権はチェチェンに対してだけでなく、ロシアの民主化を求める人々に対しても、恫喝と暴力による支配を行なっていることを指摘しなくてはなりません。

私たちは次のことを、ロシア政府に求めます。

アンナ・ポリトコフスカヤさんを殺害した真の犯人を、公正な捜査の下で逮捕し、公開の裁判にかけること。

ノーヴァヤ・ガゼータをはじめとする独立系メディア

アやNGOに対するあらゆる弾圧や不当な干渉をやめ、強権的な統治を改めること。

多くの人々を苦しめているチェチェンでの軍事行動と人権侵害をただちに停止し、これらに深く関与しているラムザン・カディロフらを訴追すること。

そしてチェチェン独立派と和平交渉を行ない、平和裏に戦争を終結させること。

歴史はかならず、人権と民主主義、そして平和を求める人々の側にあると、私たちは信じます。私たち日本に住む市民は、アンナ・ポリトコフスカヤさんを忘れず、そして無関心に陥ることなく、これからも、チェチェンの平和と、ロシアの民主化の実現を願い、日本においても連帯して行動し続けていきます。

主催者一同

以上

2007年(平成19年)9月2日(日曜日)

東 京 新

「黒幕は政敵」決着急ぐ当局

ロシア女性記者殺害

【モスクワ】権威均口 については、チャイカ検
シアの女性記者ポリトコ 事総長が「ロシア情勢を
フスカヤさん」当時(中) 不安定化させ、政権の名
Ⅱが昨年十月に殺害され 警を失墜させることを狙
た事件で、検察当局は実 った海外在住のロシア
行犯とされる人物ら十一 人」と言明。プーチン政
人を逮捕したもの、そ 権と敵対しロンドン亡命
の後、容疑者が相次いで 中の政商ベレゾフスキー
釈放される異例の事態と なっている。殺人の黒幕
を「プーチン政権に敵対 部のザカエフ氏らが黒幕
する勢力」とすること しかし、ロシア紙によ
で、事件決着を急ぐ検察 ると、逮捕者のうち元内
当局の「さんな見込み捜 務省職員ら二人が三十一
査との批判も出ている。 日までに釈放されたほ
事件では、ポリトコフ か、拘束中のFSB中佐
スカヤさんを銃撃したと ら二人もポリトコフスカ
される犯罪組織員や情報 やさん事件ではなく別件
を提供した連邦保安局 で逮捕され、近く釈放さ
(FSB) 中佐、内務省 れるといわれている。
少佐ら治安機関の元職員 ポリトコフスカヤさん
ら計十一人が先月二十八 が生前、所属していたノ
日までに逮捕された。 イバ・ガゼータ紙は、
殺人を命じた「主犯」 起訴できる十分な証拠が

容疑者相次ぎ釈放 捜査に批判



殺害されたポリトコフスカヤさんの49回目の誕生日だった先月30日、写真を掲げモスクワ市内をデモ行進する人権活動家やジャーナリストら「APないままに逮捕し、発表に踏み切ったと捜査への疑問を指摘。事件の黒幕が「政権の政敵」というチャイカ検事総長の見立てが、事件直後のプーチン大統領の発言と一致していることも挙げ、政権側に都合のよい「見込み捜査」が行われている危惧(きん)も示した。

事件については、生前のポリトコフスカヤさんが政権を厳しく批判する報道を展開してきたことから、政権内に「黒幕」がいるとの見方が国内外で強かった。年末の議会選を控え、こうした政権陰謀説を払しょくしたい大統領側近が事件の早期決着を求め、検察当局に何らかの圧力をかけたとの見方も出ている。

露女性記者殺害

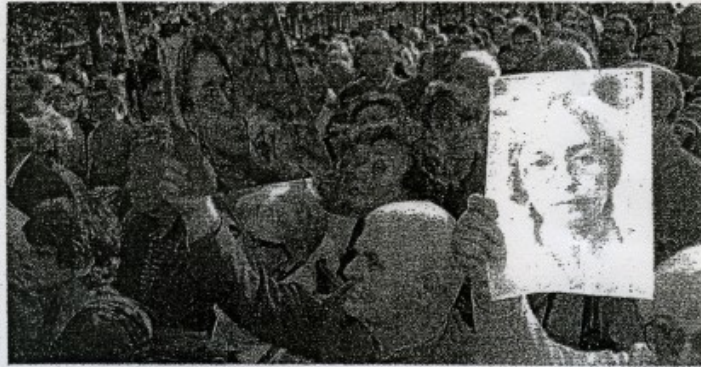
特捜責任者を解任

最高検察庁 誤認逮捕4人 迷走

【モスクワ＝瀬口利一】ロシアのプーチン大統領のチェチェン政策を批判した女性記者アンナ・ポリトコフスカヤさんが昨年10月、自宅で射殺された事件で、最高検察庁は特捜班の責任者を解任した。露メディアが4日、一斉に伝えた。殺人共謀罪などで逮捕された容疑者10人のうち4人が誤認逮捕だったことが分かり、さまざまな捜査の責任をとりとられたとみられる。

モスクワの軍事裁判所は権限をたぐらぬ国外勢力、当初、ポリトコフスカヤさんの尾行や身辺調査などにかかわったとされた連邦保安局(FSB)元中佐の「不当逮捕」について、「不当逮捕」の裁定を下した。国に亡命した政敵ボリス・ベレソフスキー氏の関与を強く示唆した。

も犯行当時のアリバイが確かめられなかったとして釈放された。チェチェン出身とされた容疑者に対しては、取り調べの際に身体に危害を加え、自白を強要した事実が明らかに近づくにつれ、事件から一年近く経過し、捜査の進展をアピールしようとする最高検の「勇み足」が露呈した格好だ。捜査経過の公表は、政治的意図がうかがえる。チャイカ検事総長は殺害を依頼した犯人について「情報操作が捜査の進展を阻



モスクワ市内のアシキン広場で、ポリトコフスカヤさんの肖像画を掲げて言論弾圧に抗議する追悼集会の参加者（8月30日、瀬口利一撮影）

んでいる」と指摘し、「真犯人を法廷で裁くのは来年以降」との見通しを示した。ポリトコフスカヤさんの「49歳の誕生日」にあたる先月30日、モスクワ市内部の広場では、野党や人権擁護団体のメンバーら約300人が追悼集会を開いた。反政府団体「もう一つのロシア」を率いるチェスの元世界王者ガリ・カスパロフ

事件に導きをつくる意図も見え隠れする中、捜査は迷走している。

京都新聞

ロシアン・ダイアリー

アンナ・ポリトコフスカヤ 著

鍛原 多恵子 訳

昨秋、モスクワで暗殺されたロシア人女性ジャーナリストが残した取材手帳の訳書。二〇〇三年十二月から二〇〇五年八月、プーチン政権が強権的性質を強めた時期に、取材でつかんだ情報を鋭い批評眼で叙述している。

驚くべき事件が次々と起きる。大統領選では、有力候補が突如失脚して出馬辞退し、不正が横行。国家保安機関の違法活動を止めようとした検事は誘拐され、人権派の学者や弁護士が襲われて死傷。メディアも市民も批判力を失った状況下で、それでも正義を希求する記者魂に圧倒される。

(NHK出版・二五二〇円)

ロシアン・ダイアリー

アンナ・ポリトコフスカヤ 著

鍛原 多恵子 訳

昨秋、モスクワで暗殺されたロシア人女性ジャーナリストが残した取材手帳の訳書。二〇〇三年十二月から〇五年八月、プーチン政権が強権的性質を強めた時期に、取材でつかんだ情報を鋭い批評眼で叙述している。

驚くべき事件が次々と起きる。大統領選では、有力候補が突如失脚して出馬辞退し、不正が横行。国家保安機関の違法活動を止めようとした検事は誘拐され、人権派の学者や弁護士が襲われて死傷。メディアも市民も批判力を失った状況下で、それでも正義を希求する記者魂に圧倒される。

(NHK出版・二五二〇円)

新潟日報

(同じ書評です)

2007. 7. 22(日).

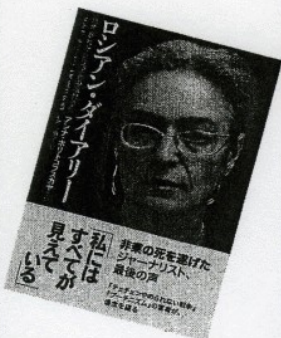
無関心とシニシズムを破って

〈力〉の冷徹さに対しては、〈感覚〉の熱で

アンナ・ポリトコフスカヤ 著
鍛原多恵子 訳

▶ロシアン・ダイアリー

暗殺された女性記者の取材手帖
6・30刊 四六判510頁 本体2400円
日本放送出版協会



テロルと強権化の相乗する時代

「私たちは二〇〇三年を生かすために、多数の人を巻き上げるのだからか」。昨年一月、モスクワで暗殺されたアンナ・ポリトコフスカとをさす。

やば、エーチェン、やめられないうち戦争（邦訳二〇〇四年の末巻）としていた。二〇〇二年十月の「フルド・オスト」のトラゲディや悲劇）をくだいた間、それは年毎を前にした偽りの感で書かれた。

「には、ポスト・フルド・オスト」の二〇〇三年は、現實がつかれる。人びとは、もうこの話にはうきやき、その権みに限られて、年足らずの「フルド・オスト」の捜査は打ち切られた。使

「私には肯定的な意見はない。そしてすべての悲劇はいづも私たちを待ち構えている」とも彼女はした。同年二月、チェエニ・独立派根拠」はないと、捜査報告

のコミソがモスクワの劇場を占拠し、観客らを人質に取って立てこもり、チェチェン戦争の終結を要求した。それに対して、ソ連時代のKGBの後継者SB（ロシア連邦保安局）特殊部隊が突入して毒

は結納付けた。それは、ポルトロフスカイ対オシニシスカイに落ちい

た。犠牲者の遺体に対しては、捜査官は、突入した治安部隊や救助隊が、ガスで殲死

たちの財布を盗んだことを

めた。一やつらも人間だ。これがわれわれが暮らしている国なんだ。給料は恐ろしく安いんだから」。

こうしてチェチェン戦争を体制強化に利用していく権力構造が、シニズムと利権と絡んで現代ロシアを覆っている。二〇〇四年九月のベスラン学校占拠事件を契機に、プーチン大統領はテロの脅威に対処する、という理由で、知事

の直接選挙を廃止して任命制にすると打ち上げた。「テロのない明るい未来」を築くと称して、テロルと強権化の相乗する時代が続く。

かつてポリトコフスカヤは、それは「個人個人がどうであるかなど関係のない時代」なのだと言ったことがある。そこで頼りになるのは、もはや「感覚」しかない。しかし、ジャーナリストの彼女

は「分析は。實際的な結論は。冷静な手側は。」と問われる。彼女の書く記事に、おおよそ決まりの構成や分析、結論も見当たらないからだ。それに対して彼女はいう。「分析する人はいても、この時代を共有すべき人がいない」ではないかと。それゆえ彼女は、「乃に翻弄され、肉親を奪われた個人のことを

〈民主主義〉の名のもとの一党独裁

〈民主主義〉の名のもとの一党独裁

自分は根っからの「民主派」
 だと言うブーチンに、人権擁
 護の活動家が引き寄せられて
 いく。かつてソヴェト体制と
 対峙したデ・シメント（異論
 派の象徴）アンドレイ・サハ
 リンは、この党の目的は「理
 念ではなく、権力」だと述べ
 ている。

ロフの人たちが、プーチン政権に参画し、支持してやまぬものである。「ロシア・ダナリー」にも言及された「ソウエト時代よりも厳しい現代ロシアの現状は、そこにも表れてはいる。ロシアでは、もっとも手ごわい反対派である、闇國の当主（場所からクレムリンに引き入れられ、力）の裏に入ると、べらう

ではない。反対派は、民主主義はありえぬ、民主主義の政治はありえぬ、はポルトコト、は皮肉にも、民主主を歩

することである。党独裁が、今にも突現

のもとに突現

「いまのロシア

書き続けたのである。そこに
あるのは、他者の境遇を自分
のもの、普遍的な人間のもの
として捉える比類なき感覚だ
った。それは、こぼれの本来
的な意味における知性、すな
わち『ロシアン

わたし人間の可能性である。たしかにホリトコフスカヤは「ジャーナリスト」だったが、通解にいわれる意味でのジャーナリストではなかった。取材やインタビューといった手法だけでは追れない、人間存在に融れる手法が、彼女の〈感真〉に迫る。彼

妙だった。それは、徹底し、強座を支えていた聞き書きの手法にもつゝ、ア文学の伝統なく、彼女のルポルタージュを、な、その感覚一読すれば明らかだろう。」

自分は根っからの「民主派」
 だと言うブーチンに、人権擁
 護の活動家が引き寄せられて
 いく。かつてソヴェト体制と
 対峙したデ・シメント（異論
 派の象徴）アンドレイ・サハ
 ンとが、ブーチンと
 ともに、この党の目的
 理念ではなく、

ロフの人たちが、プーチン政権に参画し、支持してやまぬものである。「ロシア・ダナリー」にも書かれた「ソウエト時代よりも厳しい現代ロシアの現状は、そこにも表れている。ロシアでは、もっとも手ごわい反対派である、闇國の当主（場所からクレムリンに引き入れられ、力）の裏に入ると、べらう

ではない。反対派は、民主主義はありえぬ。民主主義の政治は、皮肉にもは排利トコ

することである。党独裁が、今にも突現

「いまのロシアで、反

でチェン
賢放をめぐ
スラン学校占
地向かう
れた彼女であ
ダイアリー』
も民主派もあのエリツィン

「チャーナリスト
ているが、そ
比べれば、彼
感覚とその手
ものが際立
ほんとうの顔
は、創造的で
の現実認識の

真の民主主義などあまりに
いあいだ人びとを偽って
た」と彼女は書く。

民主派のなかには、「民主
主義を救うためには真実を
性してもよい」とする言
者もいた。すでに一九二三
の本ホワイトハウス騒動事件

るものは、ロシ
恩むせるよう
ある。

爾来、このときエリツィン
を支持した民主派やかつて
異論派の心のうちに、シニ
ズムは入り込んでいたとい
るかもしれない。真実を高
く掲げる者が、真実を養生し

イスカヤはい
たのである。それは民主主義
の形骸化であり、民主派の死
亡の（統一ロシ
体のエリツィン政権は第二
チェチェン戦争に打って出
大統領を支持

「……事案の二
チニ戦争を始め、選挙
は能く、創設して又デ
モを配した。デチエ
で数回、分設されたとき
も、独逸のテレビ局はエ
タチデソト放送しなが
されながらとホリツコ
スはいった。シシエ
極まり、人びは政治にま
手関心を失った。
「シアン・ダンリー

の敵はブーチン体制であると同時に、この無関心とシニシズムだということが痛いほど伝わってくる。通常の手法では、現実のとはりに楔を打ち

込み、無関心とシニシズムに風穴を空けて「流血のソウチ体制」の現状を伝えることとまでできない。「流血のソウチ体制」という表現は、イソグーシで同業者のジャーナリストが、他人の目や耳を避けて彼女とだけ語りつづけた

のだ。同国内で横行する私刑や国家テロを一切報道しない新聞は、でっち上げられた「インクローシの安定化」に加担している。しかも安定化は、ブ

「創造」に支えられている。もし真実を語れば、彼は職を失い、いのちを奪われかねない。それが「流血のソヴェト体制」の内実なのだ。チェク

エソのパレスチナ化は、これまでとして隣接するシベリヤを遙かに上るものである。
ソヴェト時代と見まがう「民主主義」の統制にあるのは、ジャナリストの報復も個々人がどうであらうも個々人のなかに加えられてしまふ脅威性を持っている。人間のいのちが無關心のこの冷血の時代には、冷戦時

も穏当でも、冷淡さに加担してしまふ。〈力〉の冷淡さに対しては、〈感覚〉の熱がシャナリストに残された唯一の手段だといつても過言ではない。しばしば見受けられる

とおり、ジャーナリストが異論に対する過敏な理

KGb、FSBの母校だったが、秘密警察関係者がプーチンの側近や新興財閥などのトップを占める状況は、現代ロシアの政治経済の特徴を如実に示している。そんな大兄の

なかで、彼女の部屋の前には「ソウェト時代の食品店に負けぬほど長い列」が一瞬にしてできた。チエチエ同様、法の正義が崩壊して「力」が正義を僭称し、誘拐や私刑が

絶えないインクで、墨子
を奪われた両腕たちが、や
り場のない思いを彼女に伝
えるのである。

虚偽を真実と言いくるめ、
無法を合法と騙る政治体制
は、チエチエンでの「対ア
ロ作戦」と同じ統治手法を
国中に敷いたが、『ロシ
アン・ダイアリー』がうき
よりにするのは、異論に
対するフーチン

「わがこと」を語ると陳腐だが、ポリトコフスカヤの感覚は「わがこと」として他者のことを捉えるがゆえに、もはやそれはただの「わがこと」ではなかった。

これ
体制の過激なまでの恐れである。二〇〇五年五月、サハロフを偲び音楽の夕べは、「当局」によって妨害された。そこで人権擁護の活動家たちが

異論を述べることを恐れたのである。妨害のみならず、当局は別の「サハロフ・コンサート」を開催してぶつけ、西側に向けて我こそが民主主義の言者であると宣言した。

…それが現代ロシアの「民主主義」の真相だった。

サハロフを便ぶ音楽のタベは、「誠実な生き方にまた胸がときめくうちに」と題された。そのことばは詩言的である。

眞実を言ふボリトロシアカヤの生き方、そして彼女の死にロシアの人の心は胸を心を動かされたのだろうか。無関心でシニスムを破つて、異論はとてはよつて生み出される。なほのジャーナリストはおのづか異論派であることを、いま彼女の生き方、そして暗殺の現実とともに、より深く胸に刻むべきだ。(Y)

アンナ・ポリトコフスカヤ著

ロシアン・ダイアリー

暗殺された女性記者の取材手帳

アンナ・ポリトコフスカヤは、モスクワで週2回発行される新聞「フリーアヤ・ガゼータ」の評論員を務める優れた新聞記者であった。日本では2004年から『チェチエン やめられない戦争』、『ブーチニズム 報道されないロシアの現実』(ともにNHK出版)と本書に至る3冊が出版されている。出版実現に努力された関係者の皆さんに深い感謝を捧げた。



ロシアン・ダイアリー
私には
すべてが
見えて
いる

46判・509頁・2520円
日本放送出版協会
978-4-14-081240-2

前記の内、最初の一冊が2002年に発行されてから、2006年10月に非業の死を遂げたあと、07年春に遺稿集、『何のために?』が出版されるまで単行本の出版はなかった。しかし、このことは、彼女の文章がロシアでは人びとに読まれない、た、ということではない。彼女は精力的に新聞記事執筆をつづけ、『フリーアヤ・ガゼータ』紙を魅力ある新聞とすることに

時代を超えて読み継がれる

ロシアを理解するための基礎的資料として

さいなまれ、悩めるロシアの多くの人々の相談相手となることに時間を割いた。それは、取材活動を超えたものであった。そして、温かい文章によって、呻吟する彼らを励ました。彼女自身、あからさまな威嚇におびえ、友人たちは国外脱出と記者活動からロシア問題専門家としての言論活動への移行を真剣に薦めてい

貢献してきた。そして、私たちは同紙のインターネット版を通じて、無料で毎月数回は彼女の文章に接することができた。新著『ロシアン・ダイアリー』を魅力的なものにしているのは、それら記事の執筆時の、彼女の鮮烈な感性がひしひしと伝わってくるところにある。

生前、彼女は記事執筆以上に、無慈悲な国家にた。しかし、彼女は新聞記者こそが、自らの天職と思い定めていたのだ。確かにロシアでは国家権力による情報封鎖が行われ、テレビは全て政府の息のかかった番組しか放送しなくなっている。彼女のみなならず多くのジャーナリストが物理的に消されている。だが、そうした露骨な威嚇の中でも、ロシア語をベースと

岡田 一 男

したインターネットへのアクセスさえ可能なら、実に多くの情報に接することができると。国内発の情報もさることながら、国外発の多彩なロシア語情報の海にひたれるのである。そこには、不当な圧迫を跳ね返そうとする人びとの固い決意と、それをかき乱そうと意識的に繰り出されるディスインフォメーションが絡み

合い、渦巻いている。我々が日本で携帯電話なしでは暮らせないように、モスクワでも人びとは携帯を利用し、インターネットのインフラも光回線

に移行しようとしている。そんな表面的には普通の国になろうとしているロシアの中で進む、ソビエト型全体主義への逆行現象を鋭く見据えて書かれたのが、この『ロシアン・ダイアリー』である。この新型のロシア全体主義は、かつての共産党支配時の厳しい統制もなく、「シロビキ」という用語に言い表される治



安軍事機関係者の国家機関、基幹産業の独占による野放図な国家支配を産みだした。ロシアという広大な空間を理解するための基礎的な資料として、時代の証言者、ポリトコフスカヤが書き残した文章は、時代を超えて読み継がれていくことだろう。(鍛原多恵子訳)

★アンナ・ポリトコフスカヤ(一九五八～二〇〇六)はロシア人ジャーナリスト。国立モスクワ大学卒。二〇〇六年、モスクワ市内の自宅で凶弾に倒れる。著書に『チェチエンやめられない戦争』など。

ロシアン・ダイアリー

暗殺された女性記者の取材手帳

アンナ・ポリトコフスカヤ〔著〕

鍛原多恵子〔訳〕

NHK出版〔刊〕 本体2400円税別

プーチンイズムの病

二〇〇六年十月七日、本書の著者は四十八歳で凶弾に斃れた。犯人は未だに分らないが、二〇〇三年十二月から二〇〇五年の八月までのロシアの政治状況を克明に綴った本書は、誰よりも雄弁に真犯人の姿を映し出す。プーチン大統領、FSB（ロシア連邦保安局）、チェチェンの野蛮な支配者たち、マフィアのいずれであれ、暴力的な抑圧体制を信奉する旧ソビエトの後継者たちが彼女の死を望んでいたのだ。実行犯が誰であるかは殆ど意味はない。

本書が描き出す、余りにも卑劣な、スターリン時代をも想起させる権力の暴力行為。プーチンに対抗する大統領候補、

道もポリトコフスカヤは選ばなかった。彼女にとって最も大切なのは自らの名誉でもなく生命でもなく、ベスランの悲劇を伝え、プーチン政権をロシアの現場で批判し続けることだった。子供を失った親たちが語る胸が惡くなるような現場の様子は、ただ本書をお読みいただくしかない。

ポリトコフスカヤは、ロシアの現状については悲観的だ。「現在の反体制勢力はあまりに脆弱だし、政権を倒そうという目的意識に欠ける。ロシアの人びとが自発的に抵抗運動をするとはもともと考えにくい」（四六二頁）。しかし、これは現実を見据えるジャーナリストとしての分析だ。彼女の中にあるのはもう一つ、ロシア史を貫くロシア・インテリゲンチヤの「変革者・抵抗者」としての意志である。

モスクワ郊外で孤児院を守り続けるリディア・スリエザク院長。プーチン政権が慈善事業に対する免税措置を廃止した二〇〇二年から、殆ど寄付は集まらなくなった。生まれてから他者からの愛情を殆ど受けたことも無く、また病氣や障害を持つ子供もいる。しかし院長

イワン・ルイプキンとは二〇〇四年二月七日突然失踪。そして十日にキエフに現れる。この失踪の事情は全く明らかにされず、本人の答弁も支離滅裂だった。大統領候補が突然失踪し、それに対してろくな捜査も行われないという異常事態が平然と繰り返されるのが現在のロシアである。この事件に対し、ロンドンに亡命していたアレクサンドル・リトヴィネンコは、ルイプキンにはSP-117という向精神薬が使用され、自白後の記憶喪失に陥ったのではないかと述べた（一四一頁）。このリトヴィネンコもポリトコフスカヤの死後一ヶ月もたたぬうちに毒を盛られた。

は語る。「子どもたちに必要なのは同情ではありません。（中略）必要なのは手助けなんです。私たちは彼らが生きていく手助けをしているんです。それによって、彼らに養父母が見つかるかもしれませんから」（七八頁）。彼女も職員も決してここを孤児院とは呼ばず「託児所」と呼ぶ。子供たちが養子になった時、たとえ潜在意識にも孤児院という記憶を残さないためだ。しかし、ロシアの富裕層は養子縁組にまず興味を持たない。院長はアメリカに養子に迎えられた孤児のことを心からの喜びをもつて語る。自分たちの善行を決して記憶に残させないことが子供たちの幸福だと思う姿勢には、ドストエフスキーやトルストイがあれほど愛した「ナロード」の無償の愛の精神が息づいている。

モスクワでの「ロシアの英雄（の）連時代から現在まで、様々な功績から『英雄』の称号を国家から得た人々」たちの、プーチン政権への抗議ハンストをポリトコフスカヤは伝えている。彼らはこう宣言した。「私たちは抗議し、『炎の点火役になる』時期が来たと考えている。そうす

本書で最も迫真力を持つのは、もはや「テロ」という言葉を起してしまつたチェチェンの実態である。残酷な報復に次ぐ報復の連鎖は、正直イラク情勢がまだしも平和なものに思えるほどだ。本書二六二頁の九月三日には「ベスランの人質事件で三百三十一名が死亡した」というたった一行の文章がある。これはチェチェンに近い北オセチア共和国で、テロリストが学生を人質に取った事件の結末だ。ポリトコフスカヤによれば、どう見ても千二百人はいた人質の数を、ロシアのTV放送は三百五十四人だと伝え、虚偽の報道に怒つたテロリストは子供たちに水を飲むのもトイレに行くのも禁じた。彼女は真実を報道し、同時にテロリストとも交渉しようと現地に赴こうとした。そして、飛行機内で飲み物を飲んだ直後、彼女は意識を失つて病院に担ぎ込まれたのだ。おそらく自己陶酔型の活動家なら、彼女はこの体験を大げさに書き立て、悲劇の主人公となることによって政権への抗議としただろう。もしくは口先だけの反体制なら、恐怖にとりつかれ退院後国外に亡命しただろう。いずれの

れば市民社会は私たちにならうだろうし、国家当局が何かを決定するプロセスに市民が参加することを保証してくれる法律が採択されるだろう。私たちは政治的決定の手続きがどのようになされるべきか、人びとが意見を述べる権利について、また国家の運営がいかにされるべきかについて広く社会に論争を起すためにハンストに入る」（四〇八頁）

この言葉には、「火花から炎が燃え上がるだろう」という信念でシベリア流刑を耐え抜いたデカブリスト、さらには「火花」という言葉を受け継いだロシアの革命家たちの精神に通じる変革と抵抗の意志が脈打っている。

確かに、解放を求めて収容所国家を作り出したロシア・マルクス主義は誤っていた。しかし、悪しき抑圧体制に屈服したまま生きてゆくことを拒否し、権力の暴力に対する恐怖から解放されることこそが知識人のありうべき姿だと言う彼らの精神は、その価値を少しも失つてはいないはずである。プーチン政権が何よりも恐れたのは、このような精神のあり方だったのだ。



評・三浦小太郎（評論家）